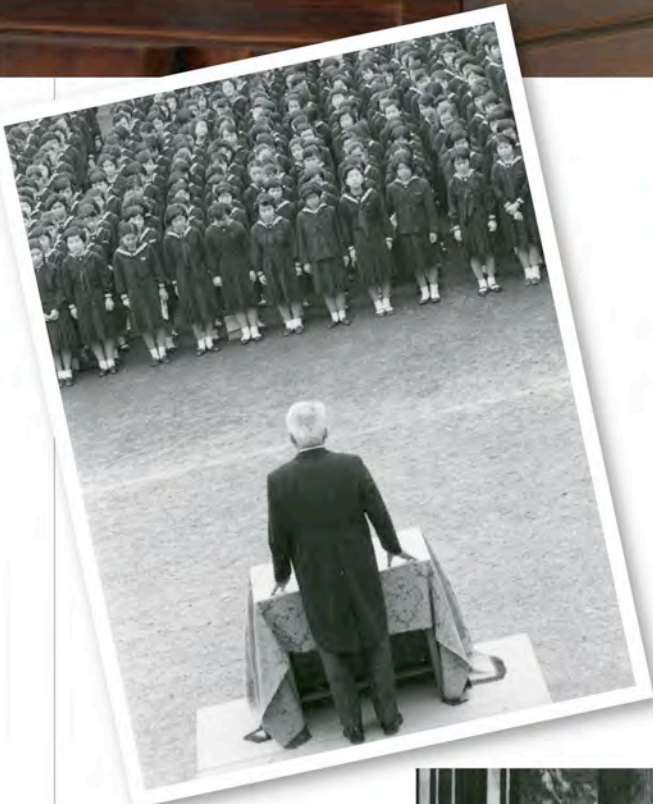




和而不同  
 安部能成

# 安倍能成 と 学習院

2013年、生誕130年を迎えた第18代学習院長・安倍能成。  
 戦後、約20年にわたり学習院長を務め、  
 私立学校として新たに出発した学習院の舵取りをにないました。  
 本特集では、学習院における安倍能成の功績を振り返り、  
 「不死鳥」のごとく生まれ変わった新学習院のルーツを探りつつ、  
 この硬骨の哲人の精神にあらためて迫ります。



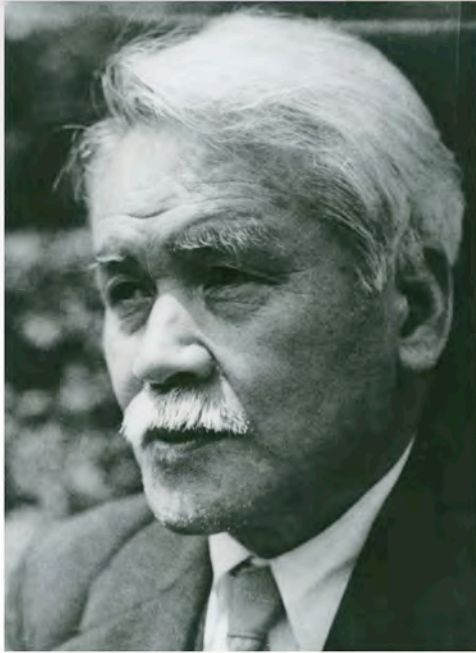
天皇誕生日に訓話を行う  
 (1959年)



大学開講式(1949年)



輔仁会文化祭にむかう(1956年)



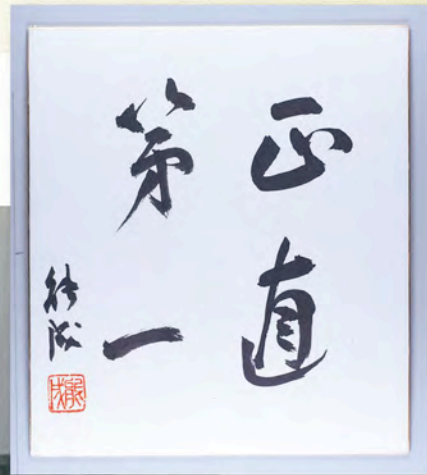
あべ よし しげ

## 安倍 能成 [1883-1966]

愛媛県松山市生まれ。

松山中学から第一高等学校を経て、1909年に東京帝国大学文科大学哲学科を卒業。慶應義塾大学予科、法政大学、第一高等学校などの講師・教授を歴任後、1926年に京城帝国大学教授に就任、1940年から第一高等学校校長を務めた。

1946年に幣原喜重郎内閣の文部大臣として米国教育使節団を迎え、教育刷新委員会委員長を歴任するなど戦後教育改革に重要な足跡を残し、多くの知識人が参加した平和問題談話会でも中心的役割を果たした。学習院長には1946年に就任、大学長・幼稚園長なども兼務し、1966年院長在職中に死去。



「正直第一」(幼稚園蔵)



幼稚園児とともに(1963年)



宴席(1960年代)

## 安倍院長こぼれ話 ～人柄を表わすエピソード～

### 院歌の披露

昭和26年6月14日(木)

午後院長の訓話あり。お話は大した事なく、御自分の作られた学習院々歌を学生に歌ってもらいたい  
お考えらしい。

「小宮(豊隆:当時短期大学部長、安倍とは学生時代からの親友)にいわせると、歌のねうちは作曲で決まる。歌詞  
など問題にならない—と言うが、私は苦心して作詞したので、趣旨を説明したい云々」と、自作の歌の説明が長々とあ  
り、歌より説明の方が面白い。院歌はどれも生硬ちぐはぐで混淆文めいたもの、日本語の混乱を如実にあらわしている  
と、教師ら冷やかした。しかし、学生が、一生懸命うたったので、院長、御満悦であった。

(渡辺千鶴子「メモ 安倍院長の訓辞その他」より。渡辺は当時女子中・高等科教員)

こぼれ話

1

### 聴衆三人

昭和28年の暮れ近く、四国・高松の市民会館で、学習院大学の安倍能成院長兼学長、小宮豊隆文  
学部長、舞出長五郎政経学部長による講演会があった。(略)

だが、この日やってきた聴衆は、ほかに中年の男性が二人だけだった。安倍氏は「何分、宣伝に慣れていないもので  
……」と苦笑しながら、それでも三人を相手に話をした。あとの二氏の講演も、予告通りで手抜きはなかった。

暖房もなく、寒々とした会場だったが、終わったとき何か胸に温かいものが宿ったのを覚えている。とりわけ、とつ弁の  
舞出氏が、難しい経済の話を理解させようとして、懸命に語った姿が感動的だった。

大学の先生の、自分の学問にかける情熱、それを人々に伝えたいとする使命感といったものに、初めて接した思い  
がした。「そうか、大学に行けば、こういう講義が聴けるのか」と、具体的なイメージがわいてきた。

(『朝日新聞』1987年4月18日)

こぼれ話

2

### 久野収

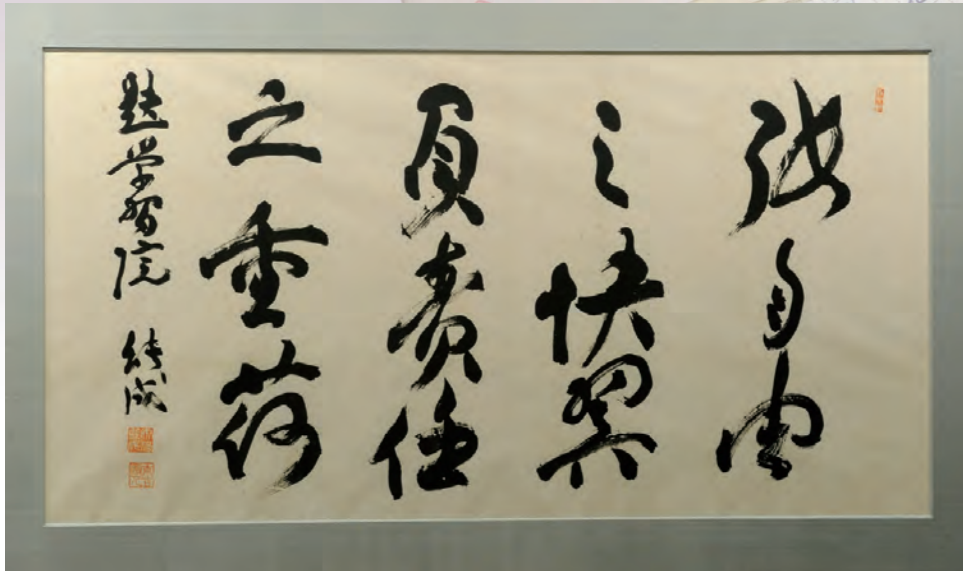
#### 「ベストを尽くした生涯—安倍能成先生の人柄にふれて」

安保反対運動のとき、学習院大学の学生が国会に突入し、検挙された。部長の教授が心配し、学生  
たちを先生の部屋に連れていって、押されてはいたので、積極的につつこんだのではなかったのだと  
説明した。不きげんだった先生はうしろをむいたままで、ほんとにそうかとたずねた。学生は、部長が好意をもってそう  
いって下さったと思うが、そうではない、自主的に決断してはいたのでと答えた。先生はくりとこちらをふりむいて、そ  
うでなければいかん、といわれ、何のこごともなかった。私はこのような先生の態度をほかにいづつか知っていて、何とも  
いえないなつかしさを感ずる。

(『東京新聞』1966年6月9日。久野は戦後を代表する哲学者・思想家で、学習院大学文学部哲学科専任講師)

こぼれ話

3



## よみがえる「自由と責任」

2012(平成24)年夏、学習院の事務金庫の中から、安倍院長揮毫の書が折りたたまれた状態で発見されました。修復・額装すると見事によみがえり、現在百周年記念会館3階の展示コーナーに収められています。先日山形県米沢市の市立第一中学校より、同様の書が校長室に保存されていることをご教示いただきました。1948(昭和23)年5月18日、安倍が同校で講演を行った際に揮毫したもので、以来「校是」として受け継がれ、1994(平成6)年にはこの書を刻んだ石碑が建立されました。右写真のように第一中学校のグラウンドのフェンスには校是が掲げられ、現在も生徒は身近に意識しながら学校生活を送っているそうです。今回学習院で発見された書は、書体から米沢のものより後の時期に書かれたと推測されますが、学習院が少なくとも50年の間、金庫に放置していたことはいただけません。それはともかく「自由の快翼を張り 責任の重荷を負う」という文言の意味を、改めて顧みる必要があるでしょう。

安倍が米沢で書を揮毫した1948年は、敗戦の記憶が生々しく残ると共に、日本国憲法が施行されて戦後民主主義が一気に開花した時期でした。国民は生活の中で自由を謳歌し、他方ではその自由が無責任・無節操な言動・精神に流れることにもつながりました。戦前より自由について思索をめぐらせてきた安倍は、自由には必ずそれだけの責任が伴うことをたびたび強調し、その逸脱を戒めてきました。

逆に考えると、「責任之重荷」を引き受ける自覚がなければ、「自由之快翼」も獲得できないのではないのでしょうか。既成概念にとらわれない自由な発想・思考や行動は、自己に対する責任意識があつてこそ可能となります。米沢での講演に先立つ1947(昭和22)年10月、安倍は学習院理事会の席上で計画中だった新制学習院大学について、「自由ナノビノビシタ教育ヲスルト云フコト、逼迫シタ現下ノ社会ニ直チニ役立つ人間ヲ養成スルト云フコトヲ如何ニ調和セシムルカハ、慎重ニ研究スベキ問題デアルガ、ホントウニ教養アル人間ヲ養フテ行キタイト思フ」との抱負を述べました。これは開学して64年を経た現在も、学習院大学にとっては重要な課題でしょう。安倍の残したメッセージは、責任の自覚を得た者こそが自由に個性を発揮し、柔軟な発想と行動を展開できると激励しているように思われるのです。

(学習院アーカイブズ 桑尾 光太郎)

